

母乳栄養児における乳児期の成長に関する検討

(分担研究：胎児・新生児の発育に関する研究)
研究協力者：山内芳忠

要約：1施設で得られた縦断的な乳児期の成長(身長、体重)におけるデータの妥当性、信頼性を検討した。その結果、身長については地域差、測定誤差は少ないと思われた。しかし体重に関しては地域差、測定誤差の可能性も考えられたので、今後、症例を増加して男女別に詳しく検討する必要があると思われた。

見出し語：母乳栄養、母乳育児、成長、体重増加

緒言：母乳栄養児の乳児期における成長について、母乳栄養の継続期間、離乳食の開始時期、並びに卒乳(断乳)との関係で、一施設の縦断的なデータを検討し報告した。即ち、当院で生まれ母乳哺育を1歳まで継続することができた男女児それぞれ100名を対象に、男女別に乳児期における成長の身体計測値を求め、文献的に考察し報告した。しかし1施設で得られた縦断的な乳児期の成長(身長、体重)におけるデータの妥当性、信頼性を検討する必要がある。

研究目的：1施設で得られた縦断的なこのデータの妥当性、信頼性を検討、特に、測定方法の影響、地域差の影響などについても検討する必要がある。そこで、当院で生まれ母乳哺育の乳児で、別のところで検診を受けた児、あるいはその他の地域(県外)で育った母乳栄養児を対象として、身体計測値のアンケート調査を行う。以上の点から一施設の縦断的なデータの妥当性、信頼性を検討することを目的とした。

研究方法：平成5年に当院で生まれた健康成熟児についてアンケート調査をおこなった。アンケート調査から母乳育児を1歳まで継続することができた乳児で、当院以外で乳児検診を受けたもの、さらに岡山県以外で育て、母乳哺育を1歳まで継続することができた乳児について、身長と体重を分析する。

研究成績：今回アンケート調査を310名に送ったが、回答は以下の通りであった。転居先不明 77名、無回答 72名、当院で健診 82名、当院以外で健診を受け1歳まで母乳の継続された対象 79名であった。今回の検討では症例数(N=79)が少ないので、体重についてはバラツキが若干大きかったが、昨年に報告した測定値にほぼ一致しており、2群間に統計学的な有意差は見られなかった。身長に関しては、昨年に報告した測定値によく一致していた。測定値の比較は表1にしめた。

考案：当初の予定では男女50名程度は十分なデータが集まると考えていたが、若い夫婦では住居の移動が多く、十分な回収率につながらなかったことから今回は、男女別に分けての検討ができなかった。310名にアンケート調査を行い、住所変更にて配達不能が77名もあり、従って今回の調査条件を満足したのは僅かに79名であった。調査結果を分析してみると体重についてはバラツキが若干大きかったが、昨年の報告した値にほぼ一致していた。バラツキの大きかった原因としては、対象児が少なかったことに加えて、データが縦断的なデータで無いことや測定誤差、地域差などの影響も考えられた。今後、さらに症例を増加して男女別に詳しい検討が必要であろう。

結論：

- #1 身長については地域差、測定誤差は少ないと思われる。
- #2 体重については地域差、測定誤差の可能性も考えられるので、今後、症例を増加して男女別の詳しい検討が必要である。

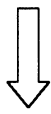
表 1 母乳栄養児における体重と身長と比較

#1 体重(g)		今回のアンケート結果
当院のみでの健診		(N=72-79)
(N=200)		
Birth	3077.3 ± 421.9	3128.5 ± 359.6
1Mo	4176.6 ± 483.8	4270.6 ± 484.5
3Mo	6319.3 ± 664.4	6587.4 ± 836.8
6Mo	7787.9 ± 831.8	7983.6 ± 948.7
9Mo	8546.4 ± 847.2	8865.2 ± 989.5
12Mo	9149.2 ± 1017.3	9495.7 ± 1190.6

#2 身長(cm)		
Birth		49.9 ± 1.9
1Mo	53.86 ± 2.16	54.6 ± 1.9
3Mo	61.07 ± 2.15	61.8 ± 2.5
6Mo	67.28 ± 2.20	67.3 ± 2.6
9Mo	71.23 ± 2.51	71.1 ± 2.9
12Mo	74.67 ± 4.04	74.4 ± 2.9



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:1 施設で得られた縦断的な乳児期の成長(身長、体重)におけるデータの妥当性、信頼性を検討した。その結果、身長については地域差、測定誤差は少ないと思われた。しかし体重に関しては地域差、測定誤差の可能性も考えられたので、今後、症例を増加して男女別に詳しく検討する必要があると思われた。